

■ 判断と決断 ■

東京五輪が開幕した。開催への賛否両論ある中ではあるが、競技を観戦し始めると、アスリートたちの世界最高の勝負に、目が釘付けになってしまう。始まった以上は、コロナの感染爆発が起きないよう、健全な医療が保てるよう願うばかりだ。

日本勢は伸び伸びと競技ができているようだ。これまで驚くほどの数のメダリストが誕生している。中でも、新種目スケートボード・ストリートで男女ともに日本人が金メダリストになったのはびっくりだった。こういった競技はアメリカで花開く。だから、日本人に世界のトップはまだ遠いと思っていた。

緊急事態宣言下での五輪の是非は議論を呼んだ。国民の命を守る医療の確保か、アスリートが夢みる大舞台の提供か。世論調査の天秤は最終段階まで釣り合ったままだった。

開催にたどり着く道程には、IOC や JOC、組織委、国、東京都……、様々な組織で意思決定があった。「開催か、延期か、中止か」、「観客をどの程度入れるか」などの大きなものもあれば、感染防止のためのセルフメダル授与など小さなものもある。見えているのは、ほんの一部であろう。水面下でなされた意思決定がどれほど多かったことか。

意思決定は判断と決断によってなされる。では、判断と決断はどう違うのか？ 早稲田大のラグビー部元監督の中竹竜二の著書『判断と決断』を参考にすれば、「判断」はものごとを過去に照らして客観的に評価することであり、「決断」は未来に対して主体的に方向性を打ち出すことである。

つまり、判断とは多くの情報やデータ（過去）から選択肢を比較検討して一つに絞り込んでいくのに対し、決断はたとえ情報やデータが不足し、結果への確信が持てなくても、未来への希望を持って行われるものである。

「時にリーダーは、未来に向かって決断を迫られる。それが妥当か否かは、歴史の審判に委ねられるだろう。リーダーとは、未来に結果責任を負う役割なのである」。開成高校の元校長の柳沢幸雄の言が重く響く。

決断は、スケートボード・ストリートの中にも常にあった。7試技中の高得点4つだけを集計するというルール。大技への挑戦を促すようにできている。自分を含む全ての選手の得意技を把握し、得点状況を踏まえて、どの技をどこで繰り出すか、安全策をとるか、大技に打って出るか。自分の決断だから、結果は転倒でも、誰もが晴れやかだった。

多くの生徒たちは将来何かしらのリーダーとなっていくだろう。少なくとも自身の人生のリーダーである。だから、様々な場面で意思決定を迫られることになる。進むか、退くか。いずれにしても、冷静さと勇気が必要だ。自分ならどうするか。判断力と決断力を日頃から鍛えておきたい。オリンピックを楽しみながら、そう思った。